鼻腔に発生した血管平滑筋腫の一症例

竹内 和郎・大槻 好正・相川 通

小針 仁美・岡村 洋沖・大谷 巖

Vascular Leiomyoma of the Nasal Cavity

Kazuo Takeuchi, Kohsei Ohtsuki, Tohru Aikawa,
Hitomi Kobari, Hiro-oki Okamura and Iwao Ohtani
(Fukushima Medical College)

A case of vascular leiomyoma of the nasal cavity is reported.

The patient was a 59-year-old male who complained of intermittent nasal bleeding in his thirties. A spherical tumor was seen on the right inferior turbinate. He was treated surgically via the transmaxillary approach under general anesthesia. The histopathological findings revealed vascular leiomyoma.

Key words: vascular leiomyoma, nasal cavity, nasal bleeding

はじめに

鼻・副鼻腔に発生する腫瘍には良性悪性を問わず種々の種類があるが、筋腫、特に平滑筋腫は非常に稀といわれる。

この部位における平滑筋腫については、1868年 Erdmann²⁾ が鼻根部に発生した症例をはじめて報告したが、その後報告も少なく、本邦においては現在までに文献上31例が報告されているにすぎない。

最近われわれは下鼻甲介より発生した vascular leiomyoma (angioleiomyoma) の1症例を経験したので、その発生頻度、発生原因、治療などについて若干の考察を加え報告する。

症 例

症例：S. M. 59歳，男性。

初診：昭和60年5月15日。

主訴：右鼻出血。

既往歴，家族歴：特記すべき事項なし。

現病歴：30歳頃より数カ月から半年に一度の割合で右鼻出血があり，すぐに止血していた。昭和60年5月頃より右鼻出血が頻回となったため，同年5月15日当科受診し，右鼻腔腫瘍の診断にて6月25日当科入院となる。

全身所見：体格中等大，栄養状態良，胸腹部・四肢に異常をみない。

その他，胸部X線検査，一般血液検査，尿検査，心電図検査で異常を認めなかった。

局所所見：前鼻鏡検査にて，右鼻腔内には下鼻甲介より発生した，表面平滑で軽度易出血性，弾性軟，淡赤色の腫瘍を認めた（図1）。

X線所見：単純X線撮影では，Waters法にて右上顎洞粘膜の肥厚像を認め，断層撮影では右下鼻甲介中央部より発生した腫瘍と右上顎洞の瀰漫性陰影を認めたが骨破壊像はなく，腫瘍

の上顎洞内への浸潤はなく、上顎洞陰影は炎症による粘膜肥厚と考えられた(図2)。

Probe 採取の結果は、肉芽組織との診断であったが、臨床的には血管線維腫などの良性腫瘍が考えられた。

図1 右鼻腔所見

下鼻甲介中央部に球状に突出した腫瘍(T)を認める
S: 鼻中隔

図2 X線断層撮影所見

右下鼻甲介中央部の球状の腫瘍(T)と右上顎洞内の陰影を認めるが、骨破壊はない

手術所見及び経過: 手術は全身麻酔下に行なわれた。腫瘍は下鼻甲介に局限したものと考えられたが、念のため健常部を含め下鼻甲介と一塊として摘出するため Denker の手術に準じて行った。

口腔前庭に切開を加え上顎骨顔面壁を剝離、露出すると上顎骨顔面壁に骨破壊はなかった。

上顎洞内粘膜は浮腫状に肥厚し、洞内には粘液の貯留が認められたが、悪性を疑わせる所見はみられず、慢性上顎洞炎と考えられた。

洞内粘膜を一塊として取出し、中鼻道自然口を大きく開放した。

腫瘍は下鼻甲介遊離縁より発生しており、下鼻甲介付着部位の鼻腔側壁を含め、下鼻甲介と腫瘍を一塊として摘出した。術中出血はほとんど認められず、術後経過は良好であった。約半年経過した現在も再発は認められない。

摘出腫瘍所見:

1) 肉眼的所見: 摘出した腫瘍は大きさ1.4 cm × 1.0 cm の弾性軟、表面平滑、球状の腫瘍で、割面は灰白色均一、充実性であった(図3, 4)。

2) 組織学的所見: H-E染色では、間質に大小様々な血管の形成と平滑筋の増殖が認められた。平滑筋は血管壁周囲に渦状に配列しており、血管壁の平滑筋より発生したものと考えられた(図5)。

図3 摘出標本

腫瘍(T)は、1.4cm × 1.0cmの大きさで、表面平滑、球状である

図4 摘出標本剖面
腫瘍の断面は灰白色均一充実性である

図5 H-E染色
不規則な内腔をもつ血管を中心に、平滑筋が渦状に増殖している

以上の病理組織学的所見より vascular leiomyoma と診断された。

考 案

鼻・副鼻腔領域における平滑筋腫は、1868年 Erdmann²⁾ が外鼻鼻根部に発生した先天性平滑筋腫を報告したのが最初といわれ、本邦では1930年大沢³⁾ による鼻入口部にできた血管拡張性脂肪筋腫の報告例が最初である。

今回われわれが渉猟しえた本邦における鼻・副鼻腔に発生した平滑筋腫は、本症例を含め32例にすぎず、その中で vascular leiomyoma は23例であった(表1)。

表 1

鼻・副鼻腔領域における vascular leiomyoma の本邦報告例

NO	報告者	報告先	症例	発生部位
1	執行 ⁴⁾	1952	48♀	右上顎洞
2	前坂 ⁵⁾	1965	49♀	右鼻腔底部
3	河辺 ⁶⁾	1967	50♂	左鼻腔側壁
4	森本 ⁷⁾	1972	33♂	外鼻
5	"		62♀	左鼻翼
6	"		20♂	左鼻腔
7	"		69♀	左鼻腔
8	"		21♂	左上顎洞
9	小高 ⁸⁾	1973	55♂	左中鼻道
10	河辺 ⁹⁾	1973	59♂	左鼻腔
11	西浦 ¹⁰⁾	1976	64♀	左鼻前庭
12	神林 ¹¹⁾	1978	55♀	鼻前庭
13	遠藤 ¹²⁾	1979	39♂	鼻中隔
14	佐伯 ¹³⁾	1979	68♂	左鼻翼内
15	滝元 ¹⁴⁾	1979	49♀	右下鼻甲介
16	高橋 ¹⁵⁾	1980	24♂	左中鼻道
17	兵 ¹⁶⁾	1980	68♂	左鼻翼内側
18	"		73♀	右中鼻道
19	西浦 ¹⁷⁾	1980	29♀	右鼻前庭
20	小森 ¹⁸⁾	1981	49♀	右鼻腔
21	"		62♂	左鼻前庭
22	佐竹 ¹⁹⁾	1985	41♀	鼻中隔
23	当症例		59♂	右下鼻甲介

平滑筋腫の病界組織学的分類は、WHOの分類では

- 1) Leiomyoma (solid)
- 2) Angioleiomyoma (vascular leiomyoma)
- 3) Epithelioid leiomyoma (leiomyoblastoma)

の3つに分けられている。

このうち leiomyoma (solid) は、子宮や消化管などに認められ、vascular leiomyoma は血管壁の平滑筋より、また epithelioid leiomyoma は立毛筋や皮膚にある平滑筋より発生するものと考えられている。

これらの平滑筋腫は、耳鼻咽喉科領域では稀なものであるが、これは、頭頸部には origin となる平滑筋が少ないためと説明されている²²⁾。

しかしその中で vascular leiomyoma は、血管の存在する部位では充分発生する可能性があり、ことに頭頸部に比較的多いといわれる²⁰⁾。

森本⁷⁾は、vascular leiomyoma 241 例について詳細に検討し、本腫瘍の好発部位は両下肢、両上肢、頭部、躯幹の順であるとのべている。

表 1 に示した鼻・副鼻腔領域における vascular leiomyoma の本邦報告例 23 例について検討を加えた。

年齢では、20 歳から 73 歳までと広範囲に認められ、性別では、男 12 例、女 11 例と性差はない。小森ら¹⁸⁾は、頭頸部の平滑筋腫を vascular type と non vascular type に分け、このうち vascular type には性差はないが、non vascular type は女性に多いと報告している。今回の集計でも、vascular leiomyoma 以外の平滑筋腫 9 例についてみると、男女比は 1 : 2 と女性に多く、小森らの報告と一致していた。

発生部位は、固有鼻腔（鼻中隔を含む）13 例で最も多く、次いで外鼻（鼻前庭を含む）8 例、副鼻腔 2 例であった。

平滑筋腫の発生原因について Duhig ら²¹⁾は、全身における平滑筋腫 61 例の詳細な検討から、その既往歴に注目し、外傷、感染などが平滑筋腫発生に関与しているのではないかと考察し、さらに 1 : 2 の割合で女性に多いことから estrogen も関係しているのではないかとこのべている。

Burrows ら²³⁾も、外傷、感染などのなんらかの刺激を受けた組織内で estrogen が集合し、細胞の異形成を高めるのではないかとこのべている。一方神林ら¹¹⁾は、鼻前庭部に発生した vascular leiomyoma の 1 症例を報告し、同部に痂皮が付きやすく感染を繰返したことが腫瘍発生の誘因と考えられると報告している。

本症例においても、30 歳代から約 30 年間にわたる鼻出血の既往があり、出血、痂皮形成の繰返し、腫瘍発生の誘因になったのではないかとと思われる。

vascular leiomyoma の治療は、良性腫瘍であり、再発、悪性化も少ないといわれており、単純摘出でよいと考えられる。しかし血管形成が豊富であるため、腫瘍の発生部位や大きさによっては出血に対処した手術法が必要である。すなわち高橋ら¹⁵⁾は、術前に腫瘍の血管造影を施行し、著明な hypervascularity が認められたため、顎動脈結紮にて摘出した鼻腔の vascular leiomyoma の 1 例を報告し、注意を促している。

本症例においては、腫瘍は小さく下鼻甲介に限局していたため、特別の出血もなく下鼻甲介とともに一塊として摘出することができた。

結 語

59 歳男性の下鼻甲介に発生した血管平滑筋腫の 1 例を報告し、併わせて文献的考察を加えた。

本論文の要旨は第 32 回日耳鼻福島県地方部会において発表した。

文 献

- 1) 岡田成正：耳鼻咽喉科領域に於ける筋腫。日耳鼻 50 : 112~121, 1944.
- 2) Erdmann K : 文献 1) より引用。
- 3) 大沢林之助：鼻腔前庭に於ける平滑筋腫の一例。日耳鼻 36 : 449~455, 1930.
- 4) 執行英毅、他：上顎平滑筋腫症例。日耳鼻 55 : 226, 1949.
- 5) 前坂明男、他：鼻腔血管平滑筋腫および鼻腔平滑筋肉腫の各一症例。耳鼻 12 : 42~47, 1966.
- 6) 河辺：17) より引用。
- 7) 森本典夫：血管筋腫（血管性平滑筋腫）の臨床病理学的研究。鹿大医誌 24 : 633~688, 1973.
- 8) 小高修二、他：鼻腔に発生せる leiomyoma 症例。耳喉 45 : 423~429, 1973.
- 9) 河辺義孝：鼻腔平滑筋腫症例（菱田 登）に対する追加症例。日耳鼻 79 : 1022, 1973.
- 10) 西浦勇雄：鼻前庭平滑筋腫の 1 症例。日耳鼻 79 : 233, 1976.
- 11) 神林潤一、他：鼻前庭部正中に発生した平滑筋腫の 1 例 (vascular leiomyoma)。耳喉 50 : 313~316, 1978.

- 12) 遠藤朝彦, 他: 鼻中隔に発生した平滑筋腫の1症例. 耳展 22: 21~25, 1979.
- 13) 佐伯和夫, 他: 鼻腔平滑筋腫の1症例. 日耳鼻 82: 326, 1979.
- 14) 滝元 徹, 他: 鼻腔平滑筋腫1例. 日耳鼻 82: 1503, 1979.
- 15) 高橋晴雄, 他: 鼻腔内に発生した血管平滑筋腫症例. 耳喉 52: 133~136, 1980.
- 16) 兵 和行, 他: 鼻副鼻腔平滑筋腫瘍症例. 頭頸部腫瘍 7: 64, 1980.
- 17) 西浦勇夫: 鼻前庭平滑筋腫の1症例. 日耳鼻 83: 1114, 1980.
- 18) 小森 貴, 他: 頭頸部平滑筋腫3症例. 耳鼻臨床 76: 2941~2949, 1983.
- 19) 佐竹敬一, 他: 鼻中隔より発生した leiomyoma の1症例. 耳喉 57: 329~332, 1985.
- 20) 荒木昭男, 他: 舌平滑筋腫の1症例. 耳展 18: 6: 615~618, 1975.
- 21) Duhig JT, et al: vascular leiomyoma. Arch Pathol 68: 424~430, 1959.
- 22) Batsakis JG: Tumors of head and neck. pp 268~270, The Williams and Wilkins Co., 1974.
- 23) Burrows M, et al: Oestrogens and Neoplasia. Charles C. Thomas Publisher, Springfield, 1952.
- (別刷請求先: 竹内和郎
〒960 福島市杉妻町4-45
福島県立医科大学耳鼻咽喉科学教室)